

大阪

大阪は商都である。当世風の「ガメツイ」という言葉が大阪人氣質の代名詞でもある。しかし、「ガメツイ」という言葉は「けちんぼう」という意味ではない。大阪人にはガメツクもうける、そして文化、芸術などを創造し育てあげる伝統が流れている。

私達一行は、十二月四日午前八時半、大阪駅に集合してバスに乗った。車中には今日の案内役である郷土史研究家の牧村史陽氏が待っていた。

バスは大阪駅を後に、今はその面影もとどめていない曾根崎村、硯川、旧海岸線の上を走って堂島川に出た。昔、この辺り一帯は蔵屋敷が軒をつらね、「天下の台所」の台所であつたが、その跡には近代的な高層ビルが建ち並び、昔に変わらぬ商都大阪の中心地となつている。堂島川に沿つて蔵屋敷跡を走るのと二十分、緒方洪庵の適塾跡に着いた。こゝで下車して内部を見る。青年時代の福沢諭吉、大村益次郎、橋本左内などが勉強にはげ

んだ二階の一間は、当時のままに伝え残されていた。適塾を出てバスは御堂筋に入り、左に芭蕉終焉の地を示す「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」の句碑を見て西へ曲り、四つ橋に出た。吉野屋橋と下繫橋のたもとに小西来山の句碑「涼しさに四つ橋を四つ渡りけり」が建つている。碑面の文字を一見して、どんよりと曇つた冬空の下を、来山が生前親しんだ一心寺へ向う。途中、千日刑場、千日墓跡を過ぎて、他屋忠兵衛などを思いおこしているうちに茶臼山に到着、大阪の陣攻防の跡をしる。

茶臼山から法然上人を開祖とする淨土宗の寺院一心寺に近づくにつれて、読経の音が聞えはじめ、線香の香りが辺りにただよつてくる。それは、念仏堂へ近づくに従つてはつきりしてきた。境内は、納骨回向を頼む賽者で賑わつていた。念仏堂の前にある来山の句碑「時雨るるやしぐれる中の一心寺」を見、更に来山の別号「湛々翁」と刻まれた墓の前に立つ。

読経の声を後にして、私達は数多くの名家墓碑のある四天王寺へと急ぐ。元禄歌舞伎の立役者の代表といわれた坂田藤十郎の墓は、

四天王寺の西門から入つた左側、義太夫語りや俳優の墓の多い墓地の、元正大師堂という古い堂の前にあつた。藤十郎の墓は、その脇にある家紋梅鉢のついた平らな記念碑にかくれるように建つているせいでもあつたが意外に小さかつた。この墓を見ながら「藤十郎の恋」「おさん茂右衛門」を想う。藤十郎の墓から少し離れたところに、前者とは対照的に立派なつくりの芭蕉の墓があつた。

四天王寺で昼食をとつた後、西鶴の墓がある誓願寺へと向う。誓願寺の表の築地はいたみ崩れているが、門は重々しく黒すんだ扉を開けていた。門前に「井原西鶴の墓」「浪華懷徳堂一門の墓」の事跡を記した碑がある。脇門をくぐり境内に入ると、古い建物は何一つなく、荒涼とした感じが胸に迫つてきた。花畑や野菜畑となつた焼跡に仮建築の住宅があり、その横を奥へ進んで行くと、最初に「懷徳堂先賢墓所」と記された建札が目についた。中井梵庵の墓をはじめ一門の人の名が読まれる。これより更に奥の方に、背後を高いコンクリート塀でさえぎられている際の一隅に、「仙皓西鶴」と大きな文字で刻まれた墓石が、僅かな繁みの中に立つていた。

誓願寺を出ると、小高い丘のような場所に、まだ真新しい感じのする集会所風の建物

(円珠庵)の横手に、朽ちた板塀を背に契沖の墓があつた。「契沖阿闍梨墓」の文字がおぼろげに残っている墓石は、揺れば壊れそうなきびしい姿であつた。

バスは、玉造・馬場町を過ぎて大阪城へ走る。日曜日の大阪城は、大変な人出。天守閣のすべての窓は行楽客で埋まり、子供達のかけあう甲高い声が、冷たい冬空に吸い取られてゆく。バスは、お堀を外周して馬場町の城門から入つて南下する。昼下りの鈍い光の中にデンと腰をすえて呼吸している昔ながらの雄壯な城にしばらく見とれる。夕日に映える大阪城の美しさを想いながら、私達は片町・東野田を通つて、近松の「心中物」の最高傑作といわれる「心中天網島」の主人公小春、治兵衛の墓所大長寺へ向う。こゝで、二人が大長寺に書き遺したといわれる書状をじかに見る。達筆であるが、薄墨で書かれたところなどやゝ弱々しい感じ。「後世の人が書き写したものである」というのは牧村氏の説。小春、治兵衛の墓の隣に、鯉の形をした墓がある。わが身の極楽往生の為に三度も飼ひ主の

ところに現われたユーモラスな鯉の幽霊の話に、笑いの一時を過ごす。世知辛い世の中にあつて、また、年を経るに従つて、自分の心に夢というものがだん／＼無くなつてゆくことに、何となく寂しさを覚える。鯉の話はともかくも、小春・治兵衛の書置(現にそこにあるもの)が、事実、彼等によつて書かれたことを故意に、そのまゝ受けとりたひような反感に似た思いが心をかすめた。

バスは、淀川の堤を走る。予定された行程は残り少ない。毛馬開門では、ごう／＼たる水流を見ることが出来たコンクリートの分厚い壁、あたゝかみの無い白っぽい水門が、灰色の空の下で活動が続けている。人工的な寂莫とした感があつた。開門から少し離れた自然の中に蕪村の碑が寂しげに小さく立っている。寂しさを感じさせるのは、辺り一面の草原と堤の上に広がる灰色の空のせいかもしれない。昼をそんなに過ぎていないのに周囲は寒く、薄暗い。堤の上で少時淀の昔様を聞く。予定されていなかった崇禅寺と、残す天満宮を廻つて、大阪駅に再び着いたのは午後三時近かつたろうか。(長井康治・加藤伸夫・横地欣也記)

彙 報

○日本文学談話会

前号でもお知らせいたしましたように「日本文学談話会」は、毎日第二土曜日午後二時から日本文学共同研究室で行つています。はじめに担当者がその日の話題の中心となる論文の要旨発表がありますので、論文所収の雑誌を用意される必要はありません。卒業生在学生会員多数の参加をお待ちしています。

第四回(一月十四日)

前田 勇「近世上方語「でえす」について」

(「国語国文」十一月号所収)

担当者 建部一男氏

第五回(二月十一日)

久松潜一「中世文学における古代の基準」

(「国語と国文学」一月号所収)

担当者 岡本彦一氏

第六回(三月十一日)

清水克彦「讀酒歌の性格」

(「女子大国文」第二十号所収)

担当者 宍戸庄治氏

○会員消息

木俣直得

大阪市浪速区南日東町一六六 上
田方より阿倍野区阪南町西二丁目